

「大内義興父子遊山書留」（藤岡家文書 1）

すすつ  
やおも  
いなた



文書館資料にみる  
病気・医療・健康

1

医師と人々①

## 大内氏と医者

大内氏が関わりを持った医者については、史料が残っていないため、ほとんど明らかになっていません。ここでは、限られた史料から、その姿をイメージしてみましょう。

### 〔都から下ってきた医者〕

大永元年（1521）の晩秋に大内義興とその嫡子義隆は、供を従え、鷹狩りと松茸狩りに出かけしています。

その時の記録（上の写真）によると、一行は、名前が判明する者だけでも 50 名を数えます。その中には、問田・野田・内藤・杉といった一族・重臣や「御走衆」と呼ばれた当主の親衛隊、陰陽博士、同朋衆（大名に近侍して芸能・茶事・雑役を務めた僧体の者）に混じって京都から下向してきた医者も 2 人同行していました。

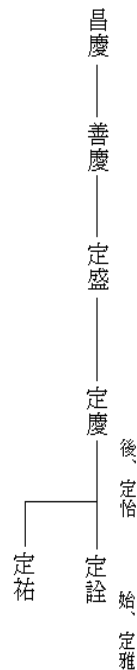
1 人は、寿皇庵周真という人物です。寿皇庵は、永正 15～17 年（1518～20）に大内氏が高嶺大神宮を造営した際の記録）によれば、一色氏家臣斎藤氏の出身で、大神宮外宮の作事始めの吉日を占ったことが知られます。

彼がいつどのような理由で周防にやってきたかはわかりませんが、あるいは大内義興が京都から帰国した際に随行したのかもかもしれません。

もう 1 人は、竹田宮内卿です。竹田宮内卿は、萩藩の本道医（内科）を務めた竹田家の先祖と考えられます。

系譜書によれば、竹田氏は藤原摂家九条氏の流れを汲む家です。南北朝期の昌慶法印は、明国に渡って洪武帝後の難産を救ったことがあり、帰国後その子孫は京都に住み代々天皇の医師を務めたといえます。その後定盛の嫡子定慶の時、招きに応じて山口に下向し大内義隆に仕えましたが、のち嫡男定雅（定詮）を山口に残して帰京したと伝えます。

竹田家に伝わった文書を確認すると、天文 22 年（1553）に竹田定詮が大内義長から長門国美祢郡内の土地の支配や周防国吉敷郡朝田村等からの税を得る権利を認められています。そして、それらの権利は義長より前の当主の時から認められたものだったようです。



【竹田氏略系図】（関聞録より作成）

さらに、同時期の文書には定桂（定慶）が上洛した場合は、彼が持っている土地を定詮が自由にしようという旨が書かれています。

これらのことから、竹田氏は義隆ではなく、その父義興のときには既に京都から山口に下向して大内氏に仕えるようになったと考えられます。

ところで、寿皇庵と竹田宮内卿は、同じ「京都下向之医師」という肩書きを持っています。しかし、前者は「御同道之衆」3 人の内の 1 人で、後者は「供奉之衆」25 人の内の 1 人です。「御同道之衆」の残り 2 人は「細川伊豆守」（幕府管領を務めた細川氏の一族）と「在安博士」（陰陽博士として名高い賀茂氏 = 勘解由小路氏）なので、彼らは客分として同行した人たちだったのでしょう。一方「供奉之衆」の残り 24 人の顔ぶれは、普通の大内氏の家臣たちです。

したがって、おおまかなイメージとして、寿皇庵はしばらく大内家に滞在している医者で、竹田宮内卿はまさに大内家に仕えていたお抱えの医者と考えてもよさそうです。後世の史料ですが、大内氏家臣を書き留めた「大内殿有名衆」には、御伽衆のなかに竹田法眼と竹田法橋の名が見えます。

## 〔外国出身の医者〕

萩藩の大組士に「張」という一字だけの名字を持つ家があります。この張氏の家伝を意識すると、以下のようことが書いてあります。

「張氏は、漢の高祖の家臣として名高い張良の末裔で、明の重臣であった張忠のとき、権力争いに敗れ、朝鮮に亡命しようとして平戸に漂着した。平戸の領主である松浦氏からその報告を受けた大内義隆は通訳を派遣して詳細を尋ね、やがて小郡にやってきた張忠と対面した。異国の習いとして、忠

孝の道を志している者は儒教と医術を学んでおり、張忠もそうだったので、名医が日本にやってきたと評判になった。その後、張忠は毛利元就に請われて安芸吉田に赴き元就の孫娘の治療にあたった。ちょうどその頃、大内義隆が重臣の陶氏に殺されてしまったため、張忠はそのまま吉田に留まり、その後陶氏を滅ぼした元就に従って山口に入り、そこで亡くなった。張忠の子である思朝（元至）は幼年の頃から元就の孫である輝元に仕えた」

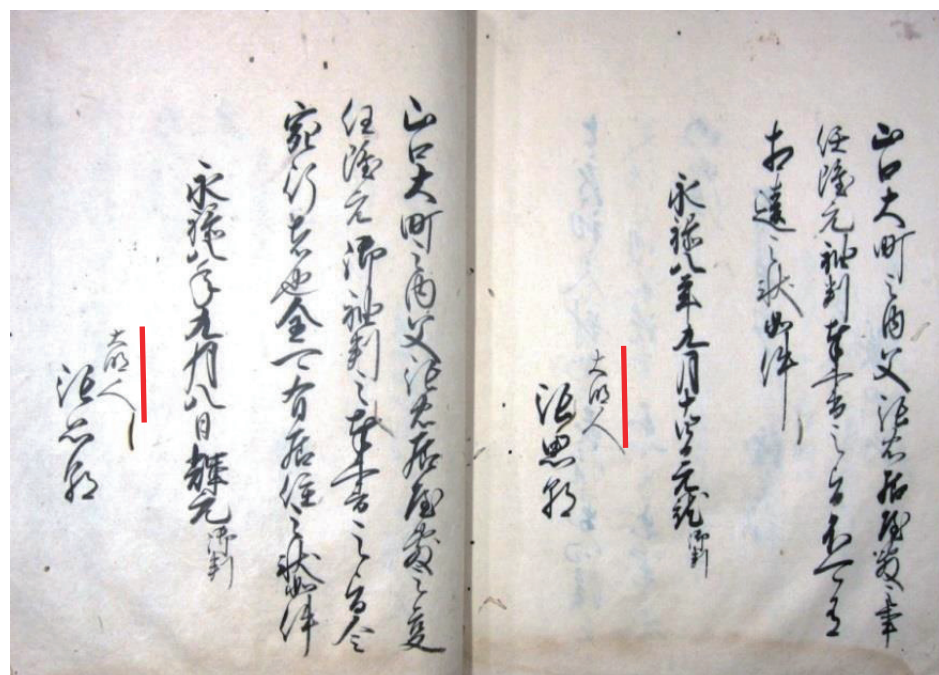
同時代の文書で張氏の活動を確認してみると、次のようなことがわかります。

①永禄 8 年（1565）毛利氏は山口大町にあった張忠の居屋敷を子どもの張思朝が所有することを認めています。注目すべきは、その文書の中の張思朝の肩書が「大名人」と記されていることです（下の写真）。張氏が明の人間だということは、本当だったのです。

②大内義隆死後の天文 23 年（1554）頃、張忠は体調を崩した石見の益田氏が快方に向かったことを陶氏に報告したことが知られます。おそらく張忠は陶氏の使者として益田氏の見舞いに行き、体調を実際に確認したのでしょう。家伝の記述と照らし合わせると、張忠に医術の心得があったからの人選だと考えられます。しかし、元就が山口に入るまでの間、張忠が毛利氏のもとにいたというのは、どうやら誤りのようです。

以上より、寿皇庵や竹田宮内卿が専門の医者と考えられるのに対して、張忠は渡来人ゆえに医術も身につけていた者という印象を受けます。

京都から来た医者と外国出身の医者。彼らの存在からは、西国の大大名として内外に知られ、豊かな経済力を備えていた大内氏の姿が浮かび上がってくるようです。



〔右〕毛利元就安堵状写

〔左〕毛利輝元宛行状写